

## 図書館事業第3フェーズ(2007～2009年)計画書

### 1. 事業名

図書館事業

### 2. 対象地域の教育状況

難民の長期化が進む中でタイ政府は学校教育にてタイ語指導を行う方針を打ち出し、教育省と教育NGO間にて話し合いを続けている。この方針の背景には1. タイ政府と難民間のコミュニケーションをより一層高めること 2. 今なお帰還の目処が立っておらず、将来的にタイ社会に統合されるかもしれないこと 3. もし帰還が始まった場合、タイーミャンマー両国間の友好関係の強化、また経済活性化にも繋がること、といった理由があげられている。しかし、すでに3言語(カレン語、ビルマ語、英語)が教えられていることから新たな言語を増やすことで子どもたちへの負担がより大きくなるのではないかと懸念されている。現在は興味のある子どももまた大人たちに対して時間外での指導を行っている。

UNHCR(国連高等難民弁務官事務所)が中心となり実施されている第三国定住政策については調整にかなりの時間を要している状況だが、同政策が開始されてからは英語指導の機会をより提供する方向にある。IOM(国際移住機関)は第三国への定住が決定した難民に対し出発前のオリエンテーションを行っているが、その中に英語指導があり、SVAの図書館が活用されている。IOMの職員が英語で絵本の読み聞かせを行ったり、大人向けの英語の蔵書の配布を行ったりしている。

第三国定住政策によって教員の多くが学校を去る状況が生じており、主に学校教育を支援しているNGOは大きな打撃を受けている。それだけでなくも長年に渡り教員の質が大きな問題となっている中、新たな教員を雇用し、指導しなければならない状況はこれまでよりも教員の質が問われてくることだろうし、学校教育の質そのものにも影響が出てくると言えるだろう。

### 3. 他の援助機関の動向

タイ教育省は全ての学年に対しタイ語の科目を導入するよう計画している。国連機関においてはまずUNHCRは「プロテクション」プログラムに力を入れており、ジェンダーを中心として孤児や少年兵の問題にも取り組んでいる。後者はUNICEFと共にChild Protection Network(CPN)を立ち上げ、対応している。

SVAは2006年度よりCPNのメンバーとなっている。

教育NGOの活動においては職業訓練を教育活動の一環として位置づけ、支援に力を入れている。例えば、オランダのZOAはカレン民族を主とする7ヶ所のキャンプで職業訓練支援活動を一気に引き受けているが、学校教育に関する予算は減少している一方、職業訓練に関する予算についてはUNHCRを中心に大きく獲得できている。これはドナーが難民の長期化に伴い技術指導の重要性を強く感じていると言える。

図書館活動においてはSVAが一気に担っていること現状は変わらないが、CBOの中で小さいながら図書館を作り運営しているところも出てきている。但し、本の冊数は非常に限られているし、SVAが配布しているような良質の絵本はまずは見られない。また自分たちの関心分野(例えばカレン青少年グループが運営している図書館であると、青少年向けにまたリーダー育成に関する本)の本に限られてくるため、利用者も偏っている。コミュニティー図書館を目指すSVAとしてはこういった図書館とどう連携を図っていくか考えていく必要があると言える。

#### 4. プロジェクトの必要性、妥当性

難民キャンプ内には学校図書館また公共図書館が皆無に等しく、学校教育以外に更なる知識や経験を習得する機会がほとんどない。また高校までしか就学の機会が提供されていないため(英語学習のコースなど高校卒業後に参加することが出来るが、一部の子どもしか機会がない)学習意欲のある子どもにとっては勉強が続けられないというあまりにも残酷な環境にある。大人にとってはキャンプ内で職業を持っている一部の人以上は日々の生活の中で何もすることがなく、同様に過酷な環境にある。これはタイ政府によりキャンプの外での就労を認められていないことが大きな要因となっている。このような中で図書館は知識や経験を高める場だけではなく、限られた社会生活から生じる心の歪を和らげる、所謂心のケアを癒す場でもある。また学校教育以外の教育の場として、機会の選択肢を広げられることは難民キャンプの子どもたちには必要不可欠である。

#### 5. SVA が取り組む意義

外の世界から切り離され、限られた環境の中での生活を強いられている難民にとって、生きる質を高めることは何より必要であり、その基盤を作り上げていくのは教育である。難民キャンプでは教育 NGO の大半により学校教育の支援が行われているが、教員中心の教授法や単なる詰め込み的な学習環境などから子どもの自主性を高めたり、思考力や想像力を育む場が今なお欠けている。そのような中で SVA が取り組む図書館事業は絵本やゲーム・絵画や工作などの芸術活動の提供を通じて難民キャンプでの教育環境改善に必要不可欠なものとなってきている。また長い難民生活の中で失われつつある民族の文化が母国語での図書配布や伝統文化活動を通じ子どもたちに伝えられつつあることも図書館事業ならではの大きな成果である。また図書館が幅広い年齢層によって活用されていること、各年齢層に向けた活動も提供されていることからコミュニティー・センターとしての役割も高まってきている。コミュニティーの活性化は子どもの教育環境の改善にも大きく寄与するものであり、この点からも図書館の持つ幅広い機能は現状の難民キャンプでは必要不可欠である。

#### 6. 対象地域、受益者数

##### (1) 難民キャンプ

###### 【対象地域】

1. Mae La Oon camp, Sobmoi District, Mae Hongson Province
2. Mae Ra Ma Luang camp, Sobmoi District, Mae Hongson Province
3. Nu Po camp, Umphang District, Tak Province
4. Umpiem camp, Pho Pra District, Tak Province
5. Mae La camp, Tha Son Yang District, Tak Province
6. Ban Don Yang camp, Sangklaburi District, Kanchanaburi Province
7. Tham Hin camp, Suan Pung District, Rachaburi Province

###### 【受益者数】

<常設図書館>

幼児、小学生、中高校生、大人、教員、高齢者などあらゆる年代層に裨益する。

25 館(7ヶ所のキャンプ)×週 1,500 人×50 週 のべ 1,875,000 人

<移動図書館>

保育園児、小学生に裨益する。

50人×50校(7ヶ所のキャンプ)×年に2回 のべ5,000人

<キャラバン公演>

幼児、小学生、中高校生、大人、教員、高齢者などあらゆる年代層に裨益する。

500人×30公演(7ヶ所のキャンプ)×年に2回 のべ30,000人

**(2) 難民キャンプ周辺のタイの村**

**【対象地域】**

1. 10 Primary Schools in Somboi District
2. 10 Primary Schools in Umphang District
3. 10 Primary Schools in Pho Pra District
4. 10 Primary Schools in Tha Son Yang District
5. 10 Primary Schools in Snagklaburi District
6. 10 Primary Schools in Suan Pung District

**【受益者数】**

<移動図書館>

小学生:1,800人(10校)×6郡=10,800人

<キャラバン公演>

小学生・教員:1,880人(10校)×6郡=11,280人

<教員研修>

教員:5人×10校×6郡=300人

**(3) ミャンマー(ビルマ)からの移住労働者の子ども**

**【対象地域】**

Around 40 Migrant Primary Schools in Mae Sot, Mae Ra Mart, Pho Pra in Tak Provinces

**【受益者数】**

調査後の結果による

**7. 実施期間**

第3フェーズとして2007年1月から2009年12月まで(2007年はその1年目にあたる)

**8. ハンドオーバーする相手と持続可能性**

事業運営に関してはキャンプ委員会また図書館委員会に譲渡して彼らによる自立性を高めていく。そのことが事業の持続可能性に繋がっていくことだと期待している。但し、財政面ではキャンプ内での生産性が望めないことから他の教育 NGO または CBO にハンドオーバーできるかどうかの可能性を検討していく。但し、3年間の期間内に帰還が開始した際には事業終了の準備に取り掛かる。

難民キャンプ周辺のタイ村への支援活動については 2008 年度からはシーカアジア財団へ引き継ぐ可能性あり。

## 9. 上位目標

ミャンマー難民キャンプの教育環境が改善され、文化保存・アイデンティティーが保護される。

## 10. プロジェクト目標と指標

【目標】 図書館活動が改善され、ミャンマー難民による図書館活動運営への参加が高まる。

【指標】 図書館利用者が 10%以上増加し、難民による自主的な活動の頻度数

## 11. 成果、活動、指標

### 1. 図書館活動

#### 【成果】

サービスの質の向上とノンフォーマル教育の実施強化

#### 【指標】

図書館利用者が 10%以上増加する

#### 【活動】

##### 1. 既存の図書館建物の拡張・改築

2006年より青少年向けの部屋が加わった新たなデザインに変更したこと、大人向けの蔵書が増え部屋が手狭になったこと等から建物の拡張を行う。(どの図書館がその対象となるかは随時検討していく)また傷んだ床・屋根の修繕を行っていきと同時に耐久性を持たせられるよう、柱を埋め込んだ部分にセメントを流し込み強化する方法を取っていく。

##### 2. 児童書の配布

日本・タイで出版されている絵本をカレン語・ビルマ語に翻訳し、訳文を貼り付ける。年に新たな絵本 25-35 タイトル(日本から 10-20 タイトル、タイから 15 タイトル)を選書して配布する。日本からの絵本については「絵本を届ける運動」との兼ね合いでタイトル数を決めていく。

##### 3. 成人用図書の配布

難民からの要望を考慮しながら幅広い分野にて、毎月1館あたり 50-60 冊の新刊本を購入し、配布する。言語はカレン語・ビルマ語・英語・タイ語の4言語による。また教員や学生向けに教科関連や語学の書籍配布にも力を入れる。

##### 4. 絵画、工作、折り紙などの文化学習活動

図書館で定期的に行う以外に、子どもの日や他の行事に合わせ絵画コンテンツなどを年に5回開催する。

##### 5. 図書館員への研修

年に2回の研修を行い、うち1回はメソットで実施する図書館員合同研修とする。但し新たな図書館員と交代した場合などは図書館活動に関する基礎研修を随時実施する。

##### 6. コミュニティーを対象とした活動

青少年、大人、高齢者向けの活動を提供し、コミュニティーを巻き込んだ図書館活動の実施を目指す。青少年向けについては「図書館青少年ボランティア」グループを各図書館に立ち上げ、SVA 図書館スタッフと一緒に人形劇(キャラバン公演)を中心とした活動を行っていく。

大人向けについてはスピーチコンテストや絵本創作コンテストなどを年に3回開催する。

高齢者向けについてはカレン民話やター(カレンの詩)に関するデーターの収集や、子どもとの交流活動などを年に6回開催する。

#### 7. 伝統文化活動

伝統楽器及び伝統舞踊楽器教室を開き、子どもから大人まで関心のある人に参加してもらう。また練習の成果を見るために年に1回各キャンプにてコンテストを実施する。

#### 8. 図書館委員会の運営能力強化

図書館員また SVA との月例会議、三ヶ月会議を実施し、活動の進捗状況や問題点等のシェアを行う。また年に1回能力強化のための研修を行う。

### 2. 絵本・教材出版

#### 【成果】

カレン語・ビルマ語の図書が増加し、難民による自主出版の活動が高められる

#### 【指標】

出版数、また難民を通じて収集された出版用データーや制作物が年間 50 を超える

#### 【活動】

##### 1. カレンの民話や歴史の収集・記録

高齢者向けの活動を通じて収集・記録する。そして図書館委員会とカレン図書編集委員会により内容を吟味し、出版用に選ぶ。年間3タイトルの民話絵本出版を目標とする。

##### 2. 絵本コンクールの開催

年に1回7カ所のキャンプ合同での絵本コンクールを開催し、入賞作品2タイトルを出版。

##### 3. 図書館活動、子どもの権利や平和教育などに関するデーターの収集

図書館活動に関連した折り紙やゲームのマニュアル本、また学校の教材向けにも合わせた子どもの権利などに関する本の出版も行う。年間3タイトルの出版を目標とする。

##### 4. 謄写版ワークショップのフォローアップと謄写版による印刷物や簡易出版物の制作・配布

これまで図書館員へ謄写版ワークショップを行ってきたが、技術面における質をより高めるために謄写版の専門家を招聘して再度ワークショップを実施する。例えばラオス事務所の元謄写版スタッフによる実施が可能かどうか等、可能性を探っていく。また「図書館新聞」等の定期的発行を各キャンプにて実施していく。また子どもによる簡易絵本作成なども実施していく。

##### 5. 作家・イラストレーター養成研修

2006年に公募した作家・イラストレーター志望のグループに対し、継続した養成を行っていく。また年に1回タイ人の作家・イラストレーターによる研修会を実施する。

##### 6. カレン図書編集委員会への研修

2006年に構成されたウンピナム難民キャンプのカレン図書編集委員会に対して年に1回タイの出版関係者による研修会を実施する。

### 3. 小学校と保育園への図書館活動

#### 【成果】

子どもたちの知識・態度・技能が向上する

#### 【指標】

図書館活動サービスを受けた学校数が全体の 8 割に到達する

**【活動】**

1. 移動図書館活動

図書館から遠い距離にある小学校と保育園に一定期間のあいだ絵本の貸し出しを行う。  
また近い距離にあっても希望する学校には同様に貸し出しを行う。

2. 教員研修

保育園と小学校の教員を対象に「絵本の意義や読み聞かせの仕方」などについての研修を年に1回実施する。

3. 図書館員による紙芝居やペープサートなどの出張公演の実施

2ヶ月に1回、図書館員が保育園・小学校をへ出張し、紙芝居など図書館で行っている活動を披露する。

4. 絵本を通じた親子ふれあい活動

幼児教育支援を行っている教育 NGO の TOPS と協力して保育園に通っている園児の両親を対象に絵本の貸し出しサービスを行う。2006 年よりすでにウンピラム難民キャンプで実施しているが、残りのキャンプにも実施していく。

**4. キャンプ周辺タイ貧困村での小学校での読書推進活動**

**【成果】**

子どもたちの知識・態度・技能が向上する

**【活動】**

1. 移動図書館箱の配布
2. 読み聞かせのついでにの教員研修
3. おはなしキャラバンの公演

**5. 移民地域の小学校での読書推進活動**

**【成果】**

子どもたちの知識・態度・技能が向上する

**【活動】**

1. 絵本の供与
2. 読み聞かせについての教員研修
3. おはなしキャラバン公演

**12. 実施体制**

<SVA>

事業コーディネーター3名、図書館スタッフ9名、出版スタッフ1名、本購入スタッフ1名、絵本制作スタッフ1名

<難民キャンプ>

コーディネーター(各キャンプ1-2名)、図書館員(各館2名、但し状況によりアシスタントを含む3名のところあり)、図書館委員会

**13. モニタリング・報告の方法**

事業の進捗状況及び問題点の把握のため、月に一度、各図書館にてモニタリングを実施する。

方法としては図書館では毎日「図書館日記」と利用者数のデータを記録してもらっているため、それらをもとに確認していく。その後、事務所にて記入したモニタリングフォームをもとに、モニタリング会議を実施。今後の改善にあたるようにする。また図書館スタッフは担当しているキャンプの活動についての月次報告を作成、毎月 10 日までに提出する。

報告についてはタイ政府、日本政府、UNHCR, UNICEF といったドナー対し、決められた形式に従い、活動また経理についての報告書を作成、提出する。(四半期ごとと年に 2 回などとドナーにより報告回数が異なる)

#### 14. 評価計画

2009 年 5 月に第三フェーズ終了評価を実施する。(但し、時期については要相談)

#### 15. 配慮事項

ミャンマー難民キャンプでは文化的背景から女性の社会参加があまり見受けられず、男性優位の環境がある。2006 年に入り UNHCR は「キャンプ内における女性の地位向上のための政策作り」を掲げ、キャンプ委員会の再編時などは女性メンバーを増やすなど関係者に働きかけている。SVA においても図書館員はほぼ女性であるが、図書館委員会となると 8 割から 9 割が男性で女性の参加がほとんど見られない。また女性のほとんどが家事・育児に終われ、地域の活動に参加する機会がほとんどない。母親を対象にした活動をこれまで以上に積極的に実施していく配慮が必要だと言える。また図書館委員会のメンバー構成にも十分配慮が必要である。